People ●ピープル●

角間惇一郎さん

社会から孤立しがちな夜の世界に生きる女性をサポートする

夜の世界で働く女性のセカンドキャリア支援を行う、一般社団法人「Grow As People」代表理事の角間惇一郎さん。ほとんどの人が気づくことのない、風俗店で働く女性たちの本音に迫り、生き方をサポートするに至った道のりについて話を伺った。

●聞き手……白井美樹（ライター）

◉一般社団法人 Grow As People（GAP）代表

人のために「何かがしたい」と模索する日々

—若くして、社会貢献活動をしようと思ったきっかけを教えてください。

角間　今33歳なので、15年くらい前のことになります。大学に入学し、モラトリアムの中、どう生きたらいいのか分からず、モヤモヤとした時間を過ごしていました。特にやりたいことがあるわけでもなく、このまま単に卒業して、何となく就職するのかと思うと、ある種の虚無感を感じずにはいられませんでした。

そのころ、社会的には「環境に配慮しよう」とか「社会貢献しよう」といった風潮がありました。そんな流れを感じ、「困った人を助けるとした場合、どんな窓口があるのだろう」と模索していると、青年海外協力隊という存在に行き当たったのです。

—青年海外協力隊に参加することを、最初は目指されたのですね。

角間　特に熱い思いがあったわけではありません。ただ、「途上国で小学校を造ろう」といった目的は分かりやすいじゃないですか。「モヤモヤしているくらいなら、行っちゃおう」という浅はかな考えから興味を持ったわけです。

でも、募集要項を確認してみると、求められている人材は、医療従事者、看護師、農業従事者、語学の先生など、専門知識を持っている人ばかりでした。そんな中、ただ一つだけ、勉強すれば自分でもできそうな仕事がありました。それが、土木・建築技術者だったのです。そこで、大学を中退し、建築の専門学校に通い始めました。

—その後はどんな道を歩んだのですか？

角間　専門学校で建築士の資格を取得し、あるゼネコン会社に就職しました。そのときも、「サラリーマンを何年かやって経験を積んだら、途上国に行くんだ」という気持ちは漠然と持ち続けていましたね。

でも、なかなかアクションに移せないジレンマをいつしか感じるようになり、とりあえず、そのときの自分にできる社会貢献を始めることにしたのです。

当時は結婚して埼玉県の越谷市に住んでいたので、地元でまちづくりの団体「NPOまちたみ」を設立し、平日にサラリーマンをやりながら、週末は勉強会を行ったり、地域を活性化させるためのイベントを開いたりするようになったのです。

孤立する風俗嬢の存在に気づく

—その後、なぜ風俗で働く人たちの支援をしようと思ったのでしょうか。

角間　2010（平成22）年のことですが、起業家として活躍している人を呼んで、勉強会を開いたときに、参加していたある青年から声をかけられました。その青年は、私と同じくらいの年頃に見えましたが、風俗店を経営しているとのことで、店の現実をいろいろと話してくれたのです。

店に勤務している女性たちの中には、進学や就職に困っていたり、子どもがいるはずなのに事務所に寝泊まりしていたり、素性を知られたくないために誰にも相談できずに生きている人が少なくないとのことでした。

その話を聞き、それまでの自分は、「社会貢献っていいよね」という浅い気持ちでやっていたことに気づかされました。自分

Profile

●かくま・じゅんいちろう●

1983年、新潟県生まれ。建築士の資格を取得後、ゼネコン会社に就職。働きながら越谷市のまちづくりを進める団体「NPOまちたみ」を設立。2010年、風俗店に勤める女性たちのインタビューを開始。2012年、一般社団法人Grow As People 設立。主に風俗店で働く女性のセカンドヤキャリア支援を行う。

 写真：カミヤス　セイ

の地元で、人知れず生きることに憂いている人たちがいることに、大きな衝撃を受けたのです。

―風俗店のオーナーと知り合ったのが、きっかけとなったのですね。

角間　それもありますが、ちょうどそのころ、世間を騒がせたある事件にも影響を受けました。その事件とは、風俗に勤める大阪市のシングルマザーが、2人の子どもをアパートに置き去りにして餓死させたというものです。当然ながら、この報道に対して、「子どもがかわいそうだ」「母親なのにむごいことをする」といった風評が大多数でした。

しかし、事件が起こるに至った背景には、社会から孤立しがちな夜の世界が抱える、問題点があるのではないかと思いました。そして、これまでエコや環境のことばかり言って、アンダーグラウンドに生きる人たちに興味を持たなかった自分を恥じるようになったのです。

―それから、どのような活動をするようになったのでしょう。

角間　脱サラをして、風俗産業で働く人（キャスト）の孤立を防ぐ事業を立ち上げたいと考えるようになりました。ただし、まずは夜の世界で何が起きているのかを知る必要がありました。そこで、越谷の風俗店などに出入りをし、勤務していた多くのキャストさんたちと話をしたのです。

広報事業部長・柳田あかねさん、事務所のアイドルのパンダのぬいぐるみと

約5000人のキャストさんと話をした結果、徐々に実情が見えてきたのです。そして、彼女たちのサポートを目的とした、一般社団法人「Grow As People（GAP）」を設立したわけです。

―キャストさんと話すことで分かった実情とは、どういうものだったのでしょうか。

角間　世間がキャストさんに持っているイメージと、実際に彼女たちが思っていることとは、かなりズレがあるということです。世間は、問題がある人が風俗の世界に行くと思っていて、「かわいそうだから、何とかしてやめさせたほうがいい」という考えです。しかし、本人たちは、理由はさまざまですが、自ら働きたいと思って働いているのです。

このズレがあると、今、彼女たちが何に本当に困っているのかが見えてこないので、課題を解決することができません。

―実際、どのようなことに困っているのでしょうか。

角間　夜の世界で働く女性は、現在33万人くらいいます。なので、当然ながらいろいろな人がいて、貧困のせいで働いている人もいれば、遊ぶ金欲しさに働いている人もいます。

そんな中、共通している問題は、年齢とともに働きづらくなり、40歳を前に限界を感じるようになるということと、人に言えない仕事をしている不安から生まれる孤立を抱えているということです。40歳といえば、まだ人生の半分ですが、自分の立場を明かせない女性が、夜の世界で働けなくなってから、次の道を探すことは並大抵のことではありません。ある意味、やってきたことが次のキャリアに生かしにくいという点で、引退後の生活を不安視しなければならないアスリートと同じだといえます。

セカンドキャリアに向けた支援

―角間さんが代表理事をされているGAPでは、そうした女性たちにどのような支援をされているのですか。

角間　個人差はありますが、キャストさんは平均して、月に12日間の実働日数で約40万円の収入があります。ただし、非稼働時は、「特に何もしていない」という人がほとんどです。その理由は、夜の仕事をしていることを誰かに知られるのが怖いからで、現状を変えたいという意志があっても、その手段や時間の使い方が分からないのが実情です。

そこで、GAPでは、夜の仕事をしながら、非稼働の時間を活用して、インターン研修などを経て、セカンドキャリアに向かえるように支援を行っています。実際、セカンドキャリアを考えるのは、40歳になってからでは遅いので、25～35歳くらいのキャストさんに、セカンドキャリアに向けた準備をすることを提唱しています。この防ぐ意味でも、非常に重要です。

―その支援はスムーズにいっていますか。

角間　まずはキャストさんたちに、安心して相談できるわれわれの存在を知ってもらわないといけないので、多くの風俗店とリレーションを作るようにしています。すぐに昼間の仕事に就職することは難しいですが、NPO団体や企業などでインターン研修を経て、就職活動をしている女性も増えています。その中で、彼女たちは、「安全に仲間ができる」という喜びも得ることができています。

―社会的な支援としてどんなことが必要だと思われますか？

角間　年齢が上がるにつれ子育て中のキャストさんの割合が多くなりますが、親子が社会的に孤立しないよう行政や地域の支援が必要だと思います。それには、われわれが得た情報やデータを社会に発信していく必要があるので、現在多くの大学や地域で講演を行ったりして、情報発信に努めています。

そのほか、夜の世界を当事者目線で考えてもらうために、風俗店を借り切って、「夜の世界スタディーツアー」も実施しています。これが大いに反響を得ていて、ある程度意識の高いボランティアや団体、政治家を目指す若者などから、申し込みが殺到しているんですよ。

夜の世界に生きる人にも、一人の人間として、みんなが向き合ってほしいですね。そして、望めば次の世界に行ける社会を作らないといけないと思っています。